

十名直喜教授のご退職にあたって

現代社会学部長 井 澤 知 旦

十名直喜先生は、2019年3月末日をもって定年退職されました。十名先生は、1992年に本学経済学部助教授として赴任され、総合研究所長（2期4年）およびキャリアセンター長（1期3年）を歴任されるとともに、2015年には現代社会学部が設立されるに合わせて異動され、新学部の礎を築かれるなど、27年間にわたり研究・教育分野で多大なる貢献をなされました。ここに本学および現代社会学部を代表して、十名先生に深甚なる感謝の意を表します。

十名先生は、1971年3月京都大学経済学部を卒業し、民間企業に21年間勤務されましたが、その間の1987年4月～1992年3月に京都大学経済研究科修士課程および博士課程で学び修了されています。

研究活動においては、民間企業時代を含め、ものづくりを軸にした半世紀に及ぶ産業研究の蓄積があり、3つに大別される分野で多大な成果を残されてきました。第一は、1971-96年の鉄鋼産業研究であり、グローバル大企業、日本的経営を系統的に分析し、その本質、光と影を提示しています。第二は、1997-2008年の陶磁器産業（瀬戸ノベルティ）研究であり、「現代産業に生きる技」の独自の「型」論を提示し、技術と文化の視点から地場産業・中小企業研究への新たな道を切り拓かれました。第三は、最近の10年間でのものづくり経済学さらには現代産業論として理論化・体系化を図ってきたことです。ものづくり経済学を日本で初めて提示し、現代産業論も30数年来待望されてきたものといわれています。その結果、これまで単著書7冊、共編著書20数冊、論文百本以上を公刊されてこられた実績は称賛に値し、研究者の鑑とでも言うべきものです。

他方、教育分野では学部生の教育指導はもとより、社会人及び留学生の博士の育成に力を入れてこられました。これまで、留学生3人を含む14人の社会人博士を社会に送り出しています。あわせて、日中学術交流の輪を広げられてこられました。具体的には留学生と連携し、著作本を中国の大学に勤務している十名ゼミOBの准教授による翻訳で出版され、中国で大学講師を務めるゼミOBも日本で単著書を出しました。このように、博士課程の十名ゼミには、現役院生を中心に博士OB、社会人研究者、他大学教員などが集い、教育・研究において多様な視点から切磋琢磨する場を構築されています。2019年1月の最終講義は、2月出版の単著書のテーマで、半世紀にわたる仕事と研究を「総括」されました。「生前葬」としてご家族も呼ばれ、OBを含む学部生・院生・教員など多数が参加され、粛々と行われました。

このような不動の実績を持たれている十名先生ですが、しっかりとした原則を持ちつつも、ユーモアあふれる教育・研究者の側面も有しておられます。学生などに自己紹介される際は「一名で

も十名（じゅうめい）と書いて、『とな』と読みます。」というのが定番になっており、毎年皆が苦笑していましたが、それが聞けない今では逆にさみしい感じがします。学内会議では「総括したうえで何をすべきかを明確にすべき」という発言も定番になっており、十名先生の好物は「味噌カツ、串カツ、総カツ」なのだと言われていました。関西（兵庫県）出身のためか、ボケ・ツッコミを理解し、会議の場を和ませてくれます。厳格であると同時に優しさとユーモアを兼ねそなえた人間味あふれる人となりには頭が下がります。

十名先生は2019年4月に本学名誉教授になりました。これまでのご貢献に対し感謝と敬意をこめ、ここに定年退職記念号をお捧げいたします。これからも、新たな環境のもとで、健康に留意されながら、日本におけるものづくり・産業研究の発展のために今後ますますご活躍されることを祈念申し上げます。